

環境に左右されない

信念を持つ

六歌仙（紀貫之が挙げた六人の優れた歌人のこと）の一人で、絶世の美女と謳われた小野小町は、「花の色は 移りにけりな いたずらに 我が身世にふる ながめせし間に（栄え咲き誇った桜の花も、むなく色あせてしまったわね。私が降り続く長雨でぼんやり時間をつぶしているうちに）」と百人一首で詠んでいます。分かりやすく言えば、かつて絶世の美女よ花よと謳われた私も、みっともなく老けこんでしまったものね。恋だの愛だの、他人との関わりのようなことに気をとられてぼんやりしているうちに・・・という事になりましょう。

な) しく過(す)ごして、万歳(ばんざい) 悔(く)ゆることなかれ」と喝破されました。日々の生活を空しく過ごさないうために、また悔いなく過ごさないうには何が必要なのでしょう？人それぞれ違いでしょうが、やはり生きる目標となるものが不可欠だろうと思います。だとすれば、目標を達成するための信念を持つ事も欠かせません。もし目標や夢、それに伴う信念というものもを蔑ろに日々何となく過ごしてしまえば、前述の小野小町にあるように、「余計なことに気をとられて、ぼんやりしているうちに」人生の終焉が近づいてきます。そして人生の終焉が近づいた頃ハッと目が覚めたように、自分の人生を振り返り、後悔と諦めにも似た心情に押し潰されそうになっておられる方も少なくないようであります。しかし、目標や夢、そして信念を持つことの重要性は分かっています、自分が思うように事が進まないのも人の世というものでしょう。

不登校十万人、引き籠もり百万人をかかえる現代社会の日本。貧困層が多い発展途上国の人間に話をすると、真顔で不思議そうに問われます。例えばタイ人に我が国の引き籠もりの現象を説明すると、「それで、どうやって生活

できるのですか？」という問いが返ってきました。彼にとつては当然の問いです。考えてもみれば、百万人が寝ていながら餓死しない天国のような社会は、発展途上国の人々には、想像を絶する社会現象と言えます。日本は、膨大な数の青年達が引き籠もつていても、どうにか生きてゆけるだけの豊かな社会を実現したのですから、先人達の努力には頭が下がります。「不景気だ、就職難だ、給料が安い」と言いながら、戦後の日本と比べると、それはもう比較の対象が違うくらい、豊かな現代社会を実現できたと言っても過言ではないのではないかと思います。

【品行方正な日本人】

一億二千万人を超える日本人が小さな島国で共同生活しているのに、暴動も起こらず、途上国に比べれば殺人や強姦や放火などもごく僅かしか起こりません。買物をしてもらっても騙されることはありません。中国や韓国のように、怒鳴り合いの喧嘩にもめったに遭遇しません。電車の中でグーグー高いびきをかいて眠っていても「お客さん、終点ですよ」と優しく車掌さんが起こしてくれます。酔っ払って路上で寝ていても、お巡りさんが優しく交番に連

れて行って宿泊までさせてくれます。私自身の体験として、先日ある施設に傘を置き忘れてしまい、気がついたのは約一週間を経たある雨の日でした。大きく丈夫な傘で、かなり重宝していただけに、置き忘れに気がついた時には、かなり落ち込みました。その施設には、毎日大勢の人間が出入りしているだけに、さすがにその傘が再び手元に戻ってくる事はないと半ば諦め気味で施設へ確認しに行きました。するとどうでしょう？一週間前、私が傘立てに置いた場所に、そっくりそのまま立てかけられていたではありませんか。これには驚きました。品行方正な人間が住む日本という国。そんな日本国民の品位を改めて感じました。そしてこんな小さな事でも、自分が日本人であるという誇りを感ずることができました。この誇りを感じるところに、目標や夢や信念という大きな柱の軸が見え隠れするわけであります。普段の何気ない生活の中で、心の奥底に眠っている命の根源に、触れることができるか否か？その意味で、環境というものが非常に大きく影響してくるものと思います。

【習慣は第二の天性を作る】

今年一月二十一日、日本人二人を拘束し、二三六億円という多額の身代金を要求されたとする衝撃的なニュースが流れました。首謀者は『過激派組織イスラミックIS・ステイト（イスラム国から改称）※以下ISと記載』という、普通の生活している私達日本人にとって、全くと言っていいほど馴染みのないイスラム過激派組織でした。日本から八千五百人以上離れているシリア・アラブ共和国（通称シリア）は、中東・西アジアの共和制国家です。北にトルコ・東にイラク・南にヨルダン・西にレバノン、南西にイスラエルと国境を接し、北西は東地中海に面している場所です。日本を含め、国際的には、こうした組織をISと称し、「イスラムの名のもとに、大量殺人など犯罪を計画・実行する過激派団体」と規定される複数の団体を指す表現として用いるそうです。

拘束された湯川春菜さんと、後藤健二さんの斬首画像、そしてヨルダン軍パイロットのムアーズ・カサーズベさんの焼殺映像がインターネットに投稿公開されました。その手法は、同じ人間が行ったとは思えない

ほど残酷非道なもので、絶句しました。改めて三人の御魂が安らかに眠られることをお祈りするばかりです。

そんなISの子供達は、どのような環境で育ち、教育を受けているのでしょうか？

ISの子供達は「異教徒は悪い奴ら。悪い奴らは殺す」という論理を叩き込まれるそうです。そしてISが投稿しているネット動画の中で、親は八歳になる息子に、「家に帰りたいか？」とたずねる場面が映し出されています。八歳の幼子は「ISに残りたい。欧州の異教徒たちと戦う聖戦の戦士になりたい」と、これが少年の答えでした。

また、イスラム過激派組織「IS」に昨年加わったシリア人の少年ジョマー君（十七）が証言しています。「人間の首を切る訓練を受けるため仲間と共に座っていた。この訓練には、わずか八歳の少年も参加していた。教官はひざまずかされ、おびえている三人のシリア兵を連れ込んできた。それはまるでタマネギの切り方を教えられているようだった」と回想しています。多くの少年（十歳程度の子供も含む）がISに加入させられ、戦闘や自爆テロの任務に就かされている現実があるのです。その人間が善か悪かを決定するのは、

生まれ育った環境が大きく由来してきます。私達人間は、生活環境の中で同じ事を何度も何度も繰り返しているうちに、それが癖になってきます。習慣は

第二の天性を作るという言葉があるように、習慣こそ善悪を分ける思想軸にとつて何より大切になってきます。「親の背を見て子は育つ」と言う様に、親をはじめ、家族や学校の先生、あるいは周辺住民の言動が子供の思考作用・精神作用に直接影響を及ぼします。つまり、社会という共同生活の精神的環境が、子供に及ぼす影響は計り知れないということなのです。日本は紛争地域とは違い、良き環境で勉強に励むことができ、素晴らしい友と出会う事ができます。

【善知識に生きる】

「知識」とは仏教用語で、友人・知人を意味する言葉です。知識の中でも正しく仏道に導いてくれる人や、仏道修行を励ましてくれる同志を「善知識（ぜんちしき）」といい、逆に仏道修行を妨げ、人を迷わして悪道に導く者を「悪知識（あくちしき）」といいます。

世界の有識者達が口を揃えて言います「二十一世紀のリーダーシップは日本国にあり」と。各人が各人の立場か

ら、仏教で説くところの「善知識」に歩みの方向を定め、精神的リーダーシップの舵取りに邁進せねばなりません。

二十世紀は二億人もの命が暴力によって奪われました。報復には報復で迎え撃つては因果応報繰り返されます。第二、第三のISが出現します。二十一世紀は非暴力によって問題解決する方法を見つけなければなりません。貧困問題の解決と、平和で平等な世界の構築を目標にし、信念を貫かれた後藤健二さんは勇敢な人生を歩まれました。さて、私達の目標や信念は揺るぎないものでしょうか？日本国という素晴らしい歴史と民意を持つ環境に身を置いていることを私達一人一人が自覚し、何となくぼんやりと遣り過ごすことなく、天寿を全うしたいものです。

合掌 副住職 谷川寛敬

